

「本日は当店のご利用
ありがとうございます。
初めてのお客様向けに特別サービスを
させていただきますね。」

「はい……」

（カフェに来る子たちに
とても良いと勧められて
このマッサージ店に
来てみたけれど……）

（裸になる必要があるだなんて……
まあ女性同士だし……
マッサージなのだから、
気にしすぎかしらね……）

「それではオイルを
塗り終わりましたので、
ここからは担当の先生に
引き継がせていただきますね。」

「えっ……？」

「本日はありがとうございます。さっそく施術を始めていきますね。」

「!? 男性!?!」

「はい。皆さん最初は驚かれますが、すぐ慣れますよ。マッサージですし、やましいことはありませんから。」

「すみません…
それでも…私、男性の方はちよつと…」

「そうですか…それは残念です。
…しかしお客様、
こちらの施術は一度始めたら
キャンセルは不可能と
なっております!」

「!? やっ!? 体が!?!」

ガシッ

ガシッ

「かかったな！ ククク。こりやまたえらい上玉じゃねえか！ また新しいグリフィンの人形が食えると思うと勃起が収まらねえぜ。」

ビクッ

「なっ そこはっ…!!」

「安心しろ。これからお前の気持ち良いところを隅々までしつかりと『マッサージ』してやるぜ！」

「騙したんですか!? くっ…!!」

「まあそう怖い顔するな。痛い目にはあわせねえし、終わる頃にはお前も最初の女やお前の仲間の人形みたいに俺の『マッサージ』の虜になってるからよ♡」

くち

くちゅ

「俺の手にかかれば、
女の弱点なんてすぐ見つけられるぜ。
お前は…ここだな♡
どうだ効くだろう？」

「んっ…！ こんなもの…
気持ち悪いだけです…！」

「ククク…
その顔もたまんねえなあ。
反応しないよう必死に
我慢してるのがバレバレだぜ？」

「この人間…悔しいけど
上手い…！」

絶妙な力加減で感度を高めながら、
こちらがイキそうになると
力を弱める…！！
焦らして私の心を疲弊させる
つもりなのだわ…！！
でも、ここで私が耐えれば
他のみんなも助けられる…！！
しつかりしなければ…！！

ゾクゾク

ぐに

ぐに

ぐちゅ

ゾクゾク

—数時間後—

「ふうっ……」
「体、いつまで
続ける気なのですか……」
「これ以上続けられても、私は何も……」

「ガハハハ!!」
口では強気でも、
寸止めの繰り返しで、
そろそろ限界だろう？
十分出来上がったみてえだし、
ここらで思いつきり
イかせてやるよっ!!」

「あんのっ!!?」
「そんなっ急に……激し……っ!!?」
「いやっ!!」
「こんな状態で
そんな激しくされたら……!!」
「あっ
ああ、ああああ!!」

ぐちゅ

じゅい

ぐちゅ

ぐ

ぐ

ぐ

「いやああああ
ああああああ!!」

「ククク、よっぽど我慢してたようだな。
派手にイって気絶しやがった。
だが、俺の『マッサージ』は
まだまだ始まったばかりだぜ?」



「あれ…私は…」

「!? なっ!? この格好は…!?」

「よう、目が覚めたか。」

「お前が眠っている間に」

「次の『マッサージ』の準備を」

「させてもらったぜ。」

「次はその身体につけた」

「器具を使わせてもらう。」

「『こんなもので、『体何を…』」

「ククク…」

「お前ら人形がとっても気に入る『施術』だぜ。」

「いぎっ!!! あっ!! あんっ!!!
ああああああああ!!!」

「どうだ？」

人形用の快楽調教装置は？
それを付けると情報伝達回路に直接
快楽信号が送信される。
絶頂に匹敵する快感が、
止めどなく襲ってくるだろ？」

「こんなやり方…卑怯よ…!!
でも、私がここで負けるわけには…!!」

「おお、その目はまだ諦めてねえみてえだな。
どれだけ耐えられるか見届けてやるぜ。」

ビク

ビクッ



—1時間後—

「ふっ!! ふうっ!!
うっ ぐうううううううう!!」

「ほほう! 大したもんだ。
ここまで耐えた人形はお前が初めてだぞ。
だが、体中が痙攣し始めて
それも限界ってところか。
そろそろ楽になったらどうだ?
ま、二度イツちまったら
堰を切ったようにもう
止まらなくなるだろうがな♡」

「ぐっ!!! うう!!
ぐううううううううう!!!」

(指揮官、みんなつ
ごめんなさいっ!!!)

私っ!!! 私.....もうっ!!!

「あっ
あああああああ!!!」

ガッ
ガッ

ガッ
ガッ

ガッ
ガッ



「あつ!!!? あああつ!!!
あああああああ!!!」

ガ
ク

ガ
ク
ク

ガ
ク

「おお、ついに決壊か!

これまで我慢した分、派手にイッてやがるぜ!」

(そんなつ 絶頂がつ... 連続できて...

終わらない...降りられない...!!!)

「ガハハハハハ！
どうだあ？ 物理的な刺激を經由しねえから、
一生アクメ決め続けられるだろ。
だが、これで終わりじゃねえぜ!!
ここで装置の出力を最大にしたら、
お前はどんなつちまうかなく？」

ビク

ビク

ビク

「!? ま、まだこれ以上が!!?
ひつ酷い……っ!!?
お願いしますっ!!
もう……イツてるのは……認めますから!!
それだけは、止めっ……」



—数時間後—

「はっ はひっ はう…うう…」

「ハツハツハ！」

すっかり蕩けた顔になっちまって。

もう最初の姿は見る影もねえな。

じゃ、そろそろメインディッシュといくか。」

ピク

ピク

ピク

「お前の身体の凝りを、

中からほぐしてしてやるぜええ！」

「……中……か……ら……？」

「うっ…!?
そ、それは…!!」

ビクン

「雌穴をマッサージするなら
これが一番だからな!
お前も他の人形と同じ、
俺のちんぽに夢中な
オナホ雌人形に変えてやるぜ!」

ゴロンッ

「私…は…あなた…の…
思い通りにはつ…なりません…!!」

ゾクン

「ひっ!? ああっ!?
あああああああああ!!!」

「ククク、身体中しつかりと
『マッサージ』した後に、
こうして俺のちんぽをハメてやれば
堕ちない人形はいねえ!
どうだ? 気持ち良すぎて
ちんぽのことしか考えられねえだろ?」

ぱちゅ

ぱちゅ

ぱちゅ

「そんなっ! こんなのっ
こんなっ あっ
あああああ!!!」

アイクツ 奥ツ
突かれる度、イっちゃう!!
すごつ すごい!!!

「時間かけて準備した甲斐があつたぜ。
ぎゅうぎゅうに締め付けてきて
ちんぽがちぎれそうだ!
こりや今まで仕込んだ
人形の中で一番かもなあ!」

ズ
ち

ず
ちゅ

ぐ
ちゅ

ぱ
ちゅ

「はひっ♡ ダメなのっに...♡
受け入れてっ しまう♡
抵抗出来ない♡
助けてくださいっ♡ 指揮官♡
このままではっ私っ♡ 私っ♡」

「くっ！ すっかり自分から腰振って
種乞いするようになりやがって！
こんなんじやもう出ちまう！
おら、中にたっぷり出してやるから、
お前もおれのオナホ人形になれ!!」

ばちゅ

「なります♡
オナホになりますから♡
中にくださいっ♡」

ばちゅ

ばちゅ

ばちゅ

ヤッ
ヤッ
ヤッ
ヤッ



ゴク

ゴク

ゴク

「出るっくっくっく!!!」

「あひ♡ ああ、

ああああああああああ!!!」

ゴク

ゴク

「ぶっついてもより出しちまった。
こいつはすげえ上玉だ。」

は——っ♡

は——っ♡

「まったく、グリフィンには
感謝してるぜ〜！
こうして雌オナホを
いくらでも提供して
くれるんだからよろ〜！
オラ！ 記念写真撮っから
自分でおまんこ開いて
媚びポーズしろ。
そうしたら次はもっと
サービスしてやる。」

くちゅ♡

「はいつ♡ 次もまた来ます♡
他の娘も紹介しますから♡
また沢山オナホとして使ってください♡」





































